

週日の説教

金 大烈 神父 2010年2月3日(水)

《固定観念》

おはようございます

皆様、よくご存知だと思いますが、旧約聖書だけでなく、新約聖書の中でも、ダビデ王は一番偉大な王として讃えられています。しかし、そのように立派な人間、立派な王と言われているダビデのことをよく考えてみますと、こんな弱虫はいないと思います。

さあ、今日読まれた第一朗読(サムエル下 24・2、9-17)をご覧ください。罪を犯したので、神様が、カドという預言者を差し向けて三つの罰の中から一つを選ぶように言われました。一つは何でしたか。『七年間の飢饉が国を襲う』こと。もう一つは『三ヶ月間敵に追われて逃げる』こと。そして三番目は『三日間あなたの国に疫病が起こる』こと。皆様ならどれを選びますか。王の立場からではなく、家族の家長として考えてみて下さい。お父さんとお母さんの心で、家族という単位で、このように三つの罰の中から一つを選びなさいと言われたら何を選びますか。親の心であれば、自分がやられる方を選ぶと思います。しかし、一国の大王と言われる者が『三日間、国に疫病が起こる』ことを選んだわけです。そして、沢山の人、『七万人』がその疫病で死んだと言うのです。それを見てダビデは反省します。そして、このように願います。『御覧ください、罪を犯したのはわたしです。わたしが悪かったのです。この羊の群れが何をしたのでしょうか。どうか御手がわたしとわたしの父の家に下りますように。』

聖書のひとつの特徴は、いつも罪を犯して悔い改めるプロセスです。悔い改める前に上手く出来事を行う様子がかがえれば、聖書を読む私達も力を得るのですが、失敗してから反省し、赦しを願うのが聖書にみられる全般的な流れです。旧約聖書は、ある意味では聖書と認めたくない内容が入っています。人間として「こんな汚いことが出来るのか」と思うくらい本当に殺し、姦通、裏切りばかりの物語がつつらわれています。しかし、カトリック教会はユダヤ教と共に、この旧約聖書をあきらめずに聖書と言うのです。その理由はなんでしょうか。それは、人間がおかす全てのことが書いてあるからです。出来る限り聖なる者になるようにと務めても、人間はこのように罪の中に生きるしかないことを教会が認めているのです。

さあ、第一朗読をもう一度見てみましょう。ダビデのこのような選びに私は本当に腹が立ちます。自分の罪のせいなのに、何故、自分がやられるのを選ばず、民が悲惨な状態になるのを選んだのか。皆様、あまり悔しく思わないで下さい。このようにダビデの弱い心が、私達全ての人間の心にもあるのです。やっぱり何か正しいことを選ぶためには葛藤が生じます。何がいいかと選ぶ時に、いつも頭の中には、正当化、合理化、そういう無意識的な動きが働きます。結局ダビデも負けてしまったのでしょう。三つの中で一番いいのは何か、自分には何がやさしいのかと、本能的に選んだのが三番目だ

ったのでしょうか。しかし、最後には悔い改めの心を表しました。そういうことが聖書で認められている事です。ですから皆様、このような箇所を読む時には、自分だったらどんな選びが出来たか考えてみましょう。そうすれば、少しでも寛大な心が与えられるのではないかと思います。

今日の福音(マルコ6・1-6)も同じ流れで考えられる話だと思います。イエス様がご自分の故郷へ帰られましたね。そして、他の所でもなさったように、ここでも会堂に入って教え始められました。色々なことをなさったようです。しかし、故郷の人々は少しおかしい目でイエス様のことを考えました。「あの力は何処から来るのか、彼の手を通して行われる奇跡は何なのか。彼は大工であり、マリアの息子であり、その兄弟姉妹たちを皆知っている者じゃないか。」と、イエスの少年時代のことを思い浮かべながら様子をつかぎました。

自分が知っている者として「私が知っている限りではそんな者ではなかったはずだ。」と、固く思うことを何と言いますか。昔から知っている人々を思い浮かべると、大体、「あの人はこんな人だった。」と言いますよね。私達は、誰かに聞かれたら「あの人は、何々の人です。」と言う前に、もう既にその人に対して、頭の中に刻まれていることがあります。「優しいとか、ちょっと意地悪いとか、堅物とか、」それを何と言いますか。固定観念と言いますよね。このような固定観念によってお互いに疲れます。

例えば、ある人が罪を犯して刑務所に入ったとしましょう。しかし、その人が心を直してどうにか社会に適応しようとしても、受け入れる所がないのです。そのような人達が充分反省して、これからは新しい人生を生きようとして刑務所から外へ出ても、社会が受け入れてくれないのです。だから、また同じ罪を犯してしまうことが常に起きます。皆様だったらこの場合どうしますか。生きるために同じことをする羽目になってしまうでしょう。これは、全の人間の一つの間違いです。他の言葉で表現するなら偏見です。

面白い話をしましょう。男女が結婚したら、新婚時代は大体男の人がよくしゃべるそうです。男の人の口数が多いのだそうです。そして、2~3年たったら逆転。女の人が今度はあれこれよくしゃべるようになるのだそうです。そして、子供が生まれたりお互いに、話す回数が増えるそうです。子供のためにお互いに意見を交わすわけです。そして、その間で色々な傷が生じるでしょう。その傷によって、お互いに、いい面では相手を解かる、見通せるようになります。ですから、ある意味で傷とは、避けるべきものだけではありません。実際に色々な傷によって、私達がお互いに少しずつ相手を理解することが出来ます。このような事が、ある意味で偏見から解放される方法じゃないかと思いません。

今の時代、沈黙ではなく、口止めの時代です。沈黙と口止めの意味の違いがありますよね。口にしないことはどういう意味ですか。口を止めることと、沈黙とはどんな違いがありますか。沈黙は、豊かな話によって満たされたことです。沈黙は音を出さない意味ではありません。沈黙と言えばその中に祈りも、人のこと考えることも、色々な黙想が入っていることを言います。口止めとは、話したくても止められて、話せないことを言います。今の時代は口が止められた時代ではないかと思いません。話

したくても話せない時代。近づいて何とか話を交わそうとしても、相手から断られる時代です。何でも疑われる時代。人間として本当に人格として認められない時代。物として数えられる時代。そうじゃないでしょうか。今のこの時代、お金が無かったら何も出来ません。この様な時代に私達は生きています。

さあ、福音に戻ってみましょう。もしこの故郷の者達が、固定観念を捨てることが出来たら、もっと多い癒しとか恵みを頂いたと思います。イエス様さえ、偏見を持っている人々の心に驚かれたと今日の福音で書かれています。皆様、それが善い偏見だったら保ってもいいと思いますが、良い偏見はないんでしょう。従って善くない偏見は、捨てるのが自分の健康のためにもいいのではないのでしょうか。もし自分でも気が付かないで、頑なになっている偏見意識、固定観念があるのではないかと、いつも自分を振り返る姿勢が必要ではないかと思ってみました。

ありがとうございました。